開かれた信仰

マルコによる福音書 2:18-21　　賈　晶淳

この証詞を準備している7月22日にノルウェーのオスロで100名近い人を無差別に殺害する事件が発生し、その容疑者がキリスト教原理主義者であるとの報道がありました。私たちが信仰するキリスト教にはその形や中身にいろいろと異なるところがあります。しかし、このような事件がキリスト教の原理主義者が起こした行為であると知らされた以上、いくらこの原理主義者と私たちが違うと言ったとしてもキリスト教の外側から見ると同じように見られ、言われるはずです。

どうして、同じキリスト教でありながらこのような恐ろしい事件を惹起することができるのでしょうか？オスロの容疑者は自らの信念と信仰が絶対正しい、この行為を以て自分は救われるだろうと思っていたのではないかと思います。そう意味で信仰とは大変恐ろしい面も持っているのです。そして、このような信仰をもキリスト教が教え、作り上げたのも事実だと思います。容疑者はある意味で自分が預言者だと思っていたかもしれません。

今日の証詞はこのような疑問を前提にしながら考えました。2 千年前のパレスチナでとは狭い地域で皆が同じくユダヤ教を信仰していたと思われます。ファリサイ派もヨハネ派も、イエスの集団も外側からみると皆同じユダヤ教徒だったはずです。ただし、内側はそうではありませんでした。やはり信仰の形態やその内容にはいろいろ違いもあり、対立構造をも持っていました。互いの違いを認めず相手を排除し、イエスまでも最後は殺してしまったわけです。人間の集団には様々な考え方や理念というものが異なったりするのは当たり前のことでしょう。しかし、どうやったらこのような対立や排他的信仰から抜け出すことができるのでしょうか。

今日の聖書である 18 節だけ見ても、それはよくわかります。

ヨハネの弟子たちとファリサイ派の人々は、断食していた。そこで、人々はイエスのところに来て言った。「ヨハネの弟子たちとファリサイ派の弟子たちは断食しているのに、なぜ、あなたの弟子たちは断食しないのですか。」

ここに断食の話が出てきます。ユダヤ教のグループの間にも例え断食をテーマにしてみても行動や考え方が違ったりしたのです。ここで意外なところを発見します。断食をするグループはファリサイ派の弟子集団のみではなく、ヨハネの弟子集団も一緒になっているというところです。この二つのグループは違うように見えるところもありますが、ある部分では共通するところもあったということです。この断食についての問いかけにも、批判にも聞こえる話はルカによる福音書 7 章 34 節には異なる表現で表しています。

人の子が来て、飲み食いすると、「見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ」と言う。

この方が批判という本音に近いものと考えられます。排他構造が鮮明に見えるのです。

さて、この断食というテーマがそれぞれのグループの性格を判断するのに使われていますように、ユダヤ教の信仰行為においては大変重要な行為の一つであるのは確かです。この断食行為はユダヤ教だけではなく、キリスト教やイスラム教、その他の宗教においても敬虔の尺度となる重要な基準の一つであります。イエスご自身も公的活動を開始する前に荒れ野へ出かけ断食を行ったと聖書に記されています。

この信仰における断食を考えた場合と同じく腹を空かしている面では飢えもありますが、双方は比べることにはなりません。断食とは飢えとは違って自らを制する行為で、目的や理由もあり、わるくいえば余裕から出てくる行為のように見えるところもあります。断食をする理由には、自己決断のしるしでもあり、苦を通して神からの恵みを感ずることによって神の前での謙虚さを表すという意味などがあると思います。

この断食行為を信仰と倫理の両面から考えてみますと、もしも断食によって他人の苦しみを感じる、例えば飢えに苦しむ人のことを覚え、或いは断食した分の余る食糧や物を貧しき者と分かち合えるよ

うなことであればそれは公的な倫理に繋がる立派な行為であると思います。しかし、その行為の有無だけで、しかもそれを基準に他者を排除しようとする宗教的な理念には納得行かない所が多いわけです。福音書にはイエスの断食については殆ど見られませんが、多数の人が何日も食べずにイエスに従ったという場面のどこかで弟子たちとこっそりと食事を取ったということは想像したくもないです。即ち、人々と一緒に食べたり飲んだりしたかもしれないが、反面飢えとも常に付き合っていたと思われます。そえを断食といえるのかは別の次元ですが。一方信仰という面から断食を判断しようとした時には、全くの個人の救いの領域で、公的倫理には満たない面を持っているのが見えます。無論断食には個人における節制の能力の面で称えるべきものがあると思いますが、それを基準し人を判断するのにはあまりにも抽象で観念のみのことで意義を出さざるを得なくなります。

という意味でファリサイ派とヨハネ派のグループの断食行為が同一視され、その上イエスのグループが断食をしていないように見えるのは当然であり、批判と攻撃の対象となるのも可笑しくありません。現代においても世界各地のキリスト教における対立や排他的姿勢には、このような要素を全く排除することはできないと思います。

さらにこのユダヤ教における断食行為を異なる角度から見てみることも面白いと思います。それは信仰におけるストイックな姿勢を常に取っているヨハネ集団の活動の場である荒野もこれと似ている面をもっています。荒野は宗教的な意味合いでとても大切な場所です。以前にも申し上げましたが、荒野とはリセットの場所と考えられます。イエスだけではなく、モーセが神と出会った場所であり、イスラエル民族がエジプトを脱出した後に 40 年間も流浪したのも荒れ野でした。これらのどちらもリセットという意味合いが含まれていると思います。40 年間のシナイ半島での流浪は奴隷根性の民族的リセットであったでしょう。洗礼にもこのようなリセットの意味合いがあると思います。しかし、このように宗教的な意味において大切な荒野であっても、隔離された避難場所として、この世を避けるためには構いませんが、一般の人がそこに留まることはしないでしょう。荒野は人が住む場所ではないのです。現在ふうに考えますと週に 1 度礼拝するために集まる教会とはこの荒野のような空間であり、礼拝こそリセットの行為だと思います。しかし、そこは留まる場所ではなく、リセットの後再びそれぞれの場に戻り、その生活の充実さをはかるところに意味が大きいと思いますし、そこに使命と責任が働くのです。モーセもイエスもエジプト荒野で個人における救いを守り抜こうとしないで町へ戻りました。ここがヨハネとイエスとの根本的に違うところだと思います。

もう一つは、ヨハネは悔い改めを強調し、洗礼を強調しました。それらの意味合いは個人的な救いのための要求でした。ヨハネのヘロデ・アンティパス王の批判もこの同一線上にあります。ヨハネのヘロデ王への批判は体制批判のように見えると思いますが、よくよく見てみますと決して王権批判ではありません。ヘロデ王が弟のお嫁さんを横取りしたことに対する批判です。要するにヘロデ王の個人としての結婚に対しての倫理的批判であります。この上、ヨハネの語録からはローマの支配に対して批判も発見することができません。ヨハネには個人への信仰・倫理的批判の性格が強く感じられます。それとは違ってモーセやイエスは個人を大切に思うだけでなく、共同性を損なう体制を批判し、公的倫理への誘いとその責任を分かち合えようとしていたと思います。

さて、現代におけるキリスト教はこのイエスとヨハネのどちらのことを大切に思いますでしょうか。前回の証詞のなかでピーター・バーガーというアメリカの社会学者の言葉を紹介しましたが、アメリカの南部の保守的教会が黒人差別と一致する(『社会学への招待』165 頁)という話をしましたが、この問題はキリスト教のみではなく、社会ともある程度共通点があると思います。全体主義や独裁政権は市民の個人的倫理を強調する面があります。それは権力支配から目をそらすためであります。そのような体制に迎合するキリスト教も間違った体制の批判よりも個人の倫理と個人の救いを強調するところに留まってしまうことを 70-80 年代の韓国のキリスト教から多く見て来ました。

日本でも戦時中に体制側は個人の倫理を強調しました。例えば女性でしたらモンペを着なければならない。着物を着ていて、パーマでもかけたら非国民といわれる雰囲気です。男性は一個人として参

戦から逃れることができません。その場合は非国民と呼ばれます。一人ひとりを国民と非国民として区別しました。同じくこの頃の日本の教会のなかでも信仰者と非信仰者として区別しようとする動きがあります。今日は読みませんでしたが、本文のすぐ前の 2 章 16 節に、ファリサイ派の律法学者は、イエスが罪人や徴税人と一緒に食事をされるのを見て、弟子たちに、「**どうして彼は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか**」と言った。このイエスの誰にも開かれた姿が教会の姿にならなければならないと思います。（第 190 号・2011.7.24.証詞より）